鹿児島カトリック教区報

〒892-0841
鹿児島市照国町13-42
カトリック鹿児島司教区
電話099（226）5100
振込口座 02030-2-8359
編集発行　教区広報部
1部60円年間〒共1100円

道標

それでも 喜び・希望・感謝
Yet…Joy! Hope! Gratitude!

戦後七十年司教団メッセージ

平和を実現する人は幸い

～今こそ武力によらない平和を

日本カトリック司教団はこれまで、一九九五年に『平和への決意　戦後五十年にあたって』、また二〇〇五年には『非暴力による平和への道』～今こそ預言者としての役割を』というメッセージを発表してきました。戦後七十年を迎える今年、ここに改めて平和への決意を表明することにいたします。（二〇一五年二月二十五日）

1　教会は人間のいのちと尊厳に関する問題に沈黙できない

カトリック教会にとって今年は、一九六二年から一九六五年にかけて行われた第二バチカン公会議の閉幕から五十年という記念すべき年にもあたります。二十世紀の前半、ヨーロッパを中心としたキリスト教会は、二つの世界大戦やナチスドイツによるユダヤ人の大量虐殺などを経験しました。これらの悲劇の反省から教会はいわゆる宗教的な領域に閉じこもるのではなく、人類の問題を自分の問題として受け止めなければならないと自覚するようになりました。第二バチカン公会議の終わりに発表された『現代世界憲章』の冒頭には、その自覚が次のような文章ではっきりと示されています。

「現代の人々の喜びと希望、苦悩と不安、とくに貧しい人々とすべての苦しんでいる人々のものは、キリストの弟子たちの喜びと希望、苦悩と不安でもある。真に人間的なことがらで、キリストの弟子たちの心に響かないものは何もない」

第二バチカン公会議後のカトリック教会は、フランシスコ現教皇にいたるまで、人間のいのちと尊厳の問題、とくに抑圧された人や排除された人の問題に真剣に、積極的に向き合おうとしています。

2　戦争放棄への決意

一九四五年までの日本の朝鮮半島などに対する植民地支配、中国や他のアジアの国々に対する侵略行為はアジアの人々に大きな苦しみと犠牲をもたらしました。また、日本人にとっても第二次世界大戦は悲惨な体験でした。一九四五年三月十日の東京大空襲をはじめ、日本の多くの都市への大規模な空爆がありました。沖縄における地上戦によって日本や外国の兵士だけでなく、多数の民間人が犠牲になりました。そして八月六日広島への原爆投下と八月九日長崎への原爆投下。これらの体験から平和への渇望が生まれ、主権在民、戦争放棄、基本的人権の尊重を基調とする日本国憲法が公布されました（一九四六年）。日本はこの平和憲法をもとに戦後七十年、アジアの諸国との信頼・友好関係を築き、発展させたいと願って歩んで来たのです。

一方、世界のカトリック教会では、東西冷戦、ベルリンの壁崩壊などの時代を背景に、軍拡競争や武力による紛争解決に対して反対する姿勢を次第に鮮明にしてきました。

ヨハネ二十三世教皇は回勅『地上の平和』において「原子力の時代において、戦争が侵害された権利回復の手段になるとはまったく考えられません」と述べています。第二バチカン公会議の『現代世界憲章』は、軍拡競争に反対し、軍事力に頼らない平和を強く求めました。一九八一年、ヨハネ・パウロ二世教皇が広島で語った平和アピールのことば、「戦争は人間のしわざです。戦争は人間の生命の破壊です。戦争は死です」にも、はっきりとした戦争に対する拒否が示されています。

以上の歴史的経緯を踏まえるならば、わたしたち日本司教団が今、日本国憲法の不戦の理念を支持し、尊重するのは当然のことです。戦争放棄は、キリスト者にとってキリストの福音そのものからの要請であり、宗教者としていのちを尊重する立場からの切なる願いであり、人類全体にとっての手放すことのできない理想なのです。

3　日本の教会の平和に対する使命

日本カトリック司教団は、特別に平和のために働く使命を自覚しています。それは何らかの政治的イデオロギーに基づく姿勢ではありません。わたしたちは政治の問題としてではなく、人間の問題として、平和を訴え続けます。この使命の自覚は、もちろん日本が広島、長崎で核兵器の惨禍を経験したことにもよりますが、それだけではなく戦前・戦中に日本の教会がとった姿勢に対する深い反省から生まれてきたものでもあります。

一九八六年九月二十六日、東京で開催されたアジア司教協議会連盟総会のミサにおいて、白柳誠一東京大司教（当時）は次のように述べました。「わたしたち日本の司教は、日本人としても、日本の教会の一員としても、日本が第二次世界大戦中にもたらした悲劇について、神とアジア・太平洋地域の兄弟たちにゆるしを願うものであります。わたしたちは、この戦争に関わったものとして、アジア・太平洋地域の二千万を超える人々の死に責任をもっています。さらに、この地域の人々の生活や文化などの上に今も痛々しい傷を残していることについて深く反省します」。これは一個人としてのことばではなく、司教協議会会長として司教団の総意を代表して述べたことばでした。さらに日本司教団は戦後五十年と六十年にあたっての平和メッセージの中で、戦前・戦中の教会の戦争責任を反省し、その上に立って平和への決意を表明しています。

4　歴史認識と集団的自衛権行使容認などの問題

戦後七十年をへて、過去の戦争の記憶が遠いものとなるにつれ、日本が行った植民地支配や侵略戦争の中での人道に反する罪の歴史を書き換え、否定しようとする動きが顕著になってきています。そして、それは特定秘密保護法や集団的自衛権の行使容認によって事実上、憲法九条を変え、海外で武力行使できるようにする今の政治の流れと連動しています。他方、日本だけでなく、日本の周辺各国の政府の中にもナショナリズム強調の動きがあることにわたしたちは懸念を覚えずにはいられません。周囲の国と国との間に緊張がある中で、自衛権を理由に各国が軍備を増強させるよりも、関係改善のための粘り強い対話と交渉をすることこそが、この地域の安定のために必要なのです。

また日本の中でとくに深刻な問題は、沖縄が今なお本土とは比較にならないほど多くの基地を押しつけられているばかりか、そこに沖縄県民の民意をまったく無視して新基地建設が進められているということです。ここに表れている軍備優先・人間無視の姿勢は平和を築こうとする努力とは決して相容れません。

5　今の世界情勢の深刻な危機の中で

今、世界を見渡せば、各地で軍事的な対立やテロの悲劇が繰り返されています。国家間、民族間の対立、宗教の名を借りた紛争が激しくなり、対話を不可能と感じさせるような状況が世界各地に広がっています。その中で数多くの人々、とくに女性や子ども、少数民族や宗教的マイノリティーの人々のいのちが脅かされ、実際にいのちが奪われています。世界各地で続くこのような惨状について、フランシスコ教皇は「第三次大戦」という人もいるだろうとの懸念を表明し、過ちを繰り返さないようにといさめました。この世界は、結局のところ、力がものをいう世界なのかと疑わざるをえないような危機的状況に直面しています。人間性を尊重する理性はどこへ行ってしまったのでしょうか。暴力を押さえ込むために新たな暴力を用いるようなやり方を繰り返していては、人類全体が破滅に向かうだけです。

世界はグローバル化された企業や金融システムの力に支配されています。その中で格差は広がり続け、貧しい人々が排除されています。人間の経済活動は気候変動や生物多様性の喪失を引き起こすまでになっています。平和の実現のためには、このような状況を変えること、世界の貧困や環境の問題、格差と排除の問題に取り組むことが不可欠です。わたしたち一人ひとりにも地球規模の問題に対する無関心を乗り越え、自分の生活を変えることが求められています。わたしたちにできることは、すべての問題を一気に解決しようとせずに、忍耐をもって平和と相互理解のための地道な努力を積み重ねることです。

おわりに

もう一度、ヨハネ・パウロ二世教皇が広島で語った『平和アピール』のことばを思い起こします。

「目標は、つねに平和でなければなりません。すべてをさしおいて、平和が追求され、平和が保持されねばなりません。過去の過ち、暴力と破壊とに満ちた過去の過ちを、繰り返してはなりません。険しく困難ではありますが、平和への道を歩もうではありませんか。その道こそが、人間の尊厳を尊厳たらしめるものであり、人間の運命をまっとうさせるものであります。平和への道のみが、平等、正義、隣人愛を遠くの夢ではなく、現実のものとする道なのです」。

わたしたちは「平和を実現する人は幸い」（マタイ5・9）というイエス・キリストのことばにも励まされます。戦後七十年、第二バチカン公会議閉幕五十年にあたり、平和を求め、平和のために働く決意を新たにしましょう。わたしたち日本のカトリック教会は小さな存在ですが、諸教派のキリスト者とともに、諸宗教の信仰者とともに、さらに全世界の平和を願うすべての人とともに、平和を実現するために働き続けることを改めて決意します。

信徒発見から百五十年

長崎教区で様々な記念行事

禁教下の一八六五年、密かに信仰を保っていた長崎・浦上のカトリック信者らが大浦天主堂でプチジャン神父にその信仰を告白、世界に衝撃と感動をもたらした「信徒発見」から百五十年。今年から「日本の信徒発見の聖母」と改称され日本固有の祝日となった、信徒発見の日である三月十七日（火）、長崎市南山手町の大浦天主堂で記念ミサがあった。ローマ教皇特使、バチカン大使代理ほか、日本の全司教も出席。ミサにあずかった人びとは、先人の苦難に思いを馳せるとともに信仰継承という神の恵みに感謝をささげた。

日本では一六一二年の徳川幕府による禁教令以後、キリスト教への迫害が本格化。当時、「キリシタン」と呼ばれたカトリック信者たちは棄教・改宗を強いられた。しかし苛烈を極めた迫害下、密かに信仰を保持・継承した信者たちが存在。一八六五年三月十七日、鎖国が解かれ外国人居留者のために建てられた大浦天主堂を訪れた浦上の信者が信仰を告白。この「信徒発見」のエピソードは「宗教史上の奇跡」として世界的な感動を呼んだ。

カトリック教会ではこれまで、三月十七日を「長崎の信徒発見記念日」と呼称。任意の記念日として典礼暦に記載してきたが百五十周年の今年から、日本固有の祝日「日本の信徒発見の聖母」として祝うこととなった。

この日、天主堂では午前六時半から計七回の連続記念ミサを実施。午前十時の大司教司式ミサには、教皇特使オルランド・ベルトラン・ケヴェド枢機卿、バチカン大使代理ヘルボジェ・シュクルレク参事官ほか、日本の全司教が出席。三百人近い会衆と共に記念の日を祝し、先人の苦難と篤い信仰を思いつつ神への賛美と感謝をささげた。

ミサの冒頭、ケヴェド枢機卿が「迫害時代の信者たちを思い起こし、これを模範として生活を刷新、日々の暮らしの中で信仰を生き生きとすることを願う」との教皇メッセージを披露。また説教では、高見大司教が潜伏キリシタンの七代（二百五十年）に渡る信仰の継承を可能とした神の恵みに感謝、信仰の希薄化する現代にあって「次世代への継承だけでなく宣教をも意識し、信仰をつなぎ広めるために一層、努力しなければ」と語った。

同ミサでは併せて、「信徒発見」を再現した寸劇、洗礼式、教区シノドス閉会式も。またこの日、天主堂記念庭園で「日本の信徒発見百五十周年記念碑」の祝福式もあった。

なお長崎大司教区では、二月から信徒発見百五十周年記念行事として、さまざまな事業を実施。大浦天主堂献堂百五十周年記念ミサ（二月十九日）のほか、三月十五日には浦上で聖母行列が、十六日には中町教会で「聖トマス西と十五殉教者記念庭園祝福式」などがあった。（報告・諏訪勝郎神学生）

大浦天主堂でささげられたミサ

定休日のお知らせ

この4月から月曜日を定休日とさせていただきます。ご了承ください。

ザビエル書院

法人解散と老人ホーム閉鎖

非営利活動法人「聖の郷ゆらいあい」

「非営利活動法人聖の郷ゆらいあい」（理事長　泉浩二神父）が経営母体となっている有料老人ホーム「聖の郷」（鹿児島市唐湊二丁目十一―二）は、建造物が介護保険法で定められている基準を満たしていないことが判明しました。

このままでは介護保険の適用が受けられず、入居者に多額の利用料を担ってもらうことになるため、理事会及び運営委員会の合意のもとに臨時総会を開き、三月三十一日をもって非営利活動法人聖の郷ゆらいあいの解散と老人ホーム閉鎖を決定しました。これまで物心両面で協力してくださった皆様に心から御礼申し上げます。

ただし二〇〇五年からレデンプトール宣教修道女会鹿児島修道院で続けてきた高齢者の集い「ゆらいあい」は出席者からの強い希望もあり、今後も第二と第四の土曜日の十一時から十四時半までの予定で継続していきます。とはいえ、この活動を続けていくためには、聖職者はもちろんのこと、食事を作ってくださる方、送迎をしてくださる方、オルガンを弾いてくださる方などたくさんの方の協力が必要です。高齢者と共に歩もうという趣旨をご理解くださり、一人でも多くの方々がボランティアとして協力してくださることを願います。

非営利活動法人「聖の郷ゆらいあい」
理事長　泉　浩二

鈴木神父のやさしいみ言葉

復活について考える

復活ということを考えるとき、「何歳くらいのときの自分で復活するのか」、とか「復活後も今の家族関係が続くのか」といったことが非常に気になるものです。共観福音書すべてに「復活についての問答」が載っていることから、こうしたことについての興味は聖書が書かれた当時から存在していたことが伺えます（マタイ22・23～33、マルコ12・18～27、ルカ20・27～40）。

さて、私たちは神様の創造によりこの世に生きるものとなったのですから、まさに神様から愛されている存在と言えます（知恵11・24、26）。このことは、神様は決して私たちを死んだままにしておかれることはない、ということを意味します。であるのなら、神様はご自分が創られたものすべてを最後には御心に適ったかたちで完成させるはずです（知恵1・13～14）。この完成こそが終末であり、神の国が実現した暁に於ける復活なのです。この創造と終末を踏まえたうえで、初めて復活ということが理解できます。

「復活」とは原語では「（神様から）起こされる」という一般的な言葉が使われているように、人間は神様によって復活させられるのであり、自分自身の力で復活するのではありません。ということは、被造物とは神様の御心に適ったかたちで復活させられると考えられます。つまり、復活させる主体は神様なのですから、私たちにとってではなく神様にとって私たちが一番良い時、一番良い関係の中で生きている時の状態で私たちは復活するのです。そして、その「良さ」とは人間として、また人間同士の関係のことではなく、神様との関係に於いてであることを忘れてはなりません。「（復活する時には、）めとることも嫁ぐこともなく、天使のようになるのだ」というイエス様の言葉はまさにこのことなのです（マタイ22・30、マルコ12・25、ルカ20・35）。この「天使」という言葉にみられるように、復活とはこの地上で実現する神の国で神様やイエス様と共に個々に生きることなのです。これが歴史の完成であり、私たちの希望である終末なのです。

教区人事

▼**小川靖忠神父**（指宿教会主任）は、紫原教会主任

▼**寝占敦之神父**（紫原教会主任）は、指宿教会主任並びに白百合幼稚園園長

▼**末吉卓也神父**（日本カトリック神学院）は教区本部付き事務局長

※いずれも四月一日付、但し着任は復活祭後の見込み

+KABAYAN SEKSYON+

Abraham:Ating Ama sa Pananampalataya

Lahat ng tatlong dakilang relihiyon na kumikilala sa isang Diyos (Judaismo, Kristiyanismo at Islam) ay nagpaparangal sa malalim na pananampalataya ni Abraham. Sa Unang Panalanging Eukaristiko ng Simbahan, tinutukoy si Abraham bilang "ating ama sa pananampalataya".

Ang pananampalataya ni Abraham ay ipinamalas sa kahandaan niyang lisanin ang sariling bansa at maglakbay sa isang lupaing ipapakita sa kanya ng Diyos (Gen 12).Hinamon siyang magtiwala na ang kabiyak niyang si Sara, bagamat matanda at lampas na sa edad ng panganganak, ay magsisilang ng isang sanggol na lalaki (Gen 18). Sinubok siya ng Diyos nang hilingin sa kanyang ialay ang minamahal niyang anak (Gen 22).

Si Abraham ay isang modelo ng pananampalataya (Heb 11:8-12) dahil tumugon siya sa paanyaya ng Diyos nang buong pagsunod at pagtitiwala. Katulad natin, madalas siyang naglakad sa dilim, taglay lamang ang liwanag ng pangako ng Diyos at katapatan, at hindi nagtataglay ng buong pag-unawa o kaliwanagan.

Ang pananamplataya ay nangangahulugan ng pagmamahal at pagkakilala sa Diyos na nanguguna sa atin. Sa pananampalataya, "*hindi* natin alam kung ano ang idudulot ng hinaharap, ngunit kilala natin kung *sino* ang may hawak ng ating kinabukasan."

Sinubok ang pananampalataya ni Abraham at napatunayang itong dalisay; gaya ng lahat na tunay na pananampalataya, ito ay nakabatay sa iisa at totoong Diyos.

Katesismo sa "Taon ng Pananampalataya (Fr.Dino Orolfo)

ほんとうに自由ですか？

四旬節に青少年対象の黙想会

教区青年会（岩崎信幸代表）は三月八日（日）、ザビエル教会と教区本部で「四旬節青少年黙想会」を行った。

黙想指導は出水教会主任司祭・石田望神父。「自由」について、キリスト教の視点から考え、「執着」を離れ「貧しく生きる」ことが「ほんとうの自由」につながることを学んだ。

同黙想会は毎年、四旬節をより意味あるものとして過ごし、一層豊かな復活祭を迎えるため、実施しているもの。今年のテーマは「自由」で、キリスト者としての「自由」のあり方を黙想した。

石田神父は、「ほんとうに自由ですか？」との質問から講話に入った。

「自由」と「わがまま」の境界、テロを誘発した仏の言論の自由の問題など、「自由」の概念の複雑さを提示。「自由」とは言いつつもさまざまな社会的制約を、誰もが何らかの束縛を受けているのが人間の現状と指摘した。

「もし子があなたたちを自由にすれば、あなたたちは本当に自由になる」（ヨハ八：36）を引いた神父。現代人は「心の満たされない部分を『モノ』で埋め、紛らわそうとする傾向にある」と種々の依存症を例示。「イエスさまが私たちの心を自由にしてくださると、社会でのさまざまな束縛から『自由』になることができる」と説いた。

そして創世記三章のエピソードから、アダムとエバが恥じる「裸」とは「人間が人前にさらすことのできない心」と解説。それこそが各人の抱える「心の満たされない部分」。社会が「負い目」と見なすような各人の心の満たされない部分をも「私自身」として向き合い、受け容れることが真実の祈りにつながるとともに「ほんものの自由」へと至ることを語った。

また、満たされない心を「モノ」で補う心理に、依存という「執着」を見る神父は、「モノ」を手放し「貧しく生きる」ことが「ほんものの自由」に至る一つの手だて、ここに四旬節の「断食」の意味もあることを説いた。

この日、青年ら十一人が参加。講話に続き、ミサもあった。

（報告・諏訪勝郎神学生）

五月五日に来日五十周年ミサ

レデンプトール宣教修道女会

鹿児島市唐湊に活動拠点があるレデンプトール宣教修道女会が来日したのは今から五十年前（一九六五年）の五月三日。最初のメンバーはモニカ、スザンナ、カタリナの三人だった。

以来、同修道会は谷山や鴨池などの教会で司牧の手伝いをし、また女子学生寮「聖母寮」を運営するなど教区の宣教司牧に協力してきた。

今では諸事情から学生寮は閉鎖されたが、児童養護施設「愛の聖母園」の運営、高齢者の集いの場の設置に協力するなどその働きは大きい。そんなレデンプトール宣教修道女会では、来日五十年を記念し、教区民とともに五月五日（火）十四時から谷山教会で感謝のミサをささげたいとしている。

感謝ミサの司式は郡山司教で、ミサ後は信徒会館で茶話会も計画している。教区のために多くの犠牲を払ってくれた同修道会のために、多くの信者に参列してほしい。

来日五十周年感謝ミサ

日　時　五月五日（火）十四時

場　所　谷山教会

司　式　郡山健次郎司教

短信

▼愛の聖母園が研修会

二月二十一日（土）児童養護施設「愛の聖母園」では教区本部を会場に、在園する子どもたち向けの研修会を開いた。指導したのは福崎英雄神父（谷山教会）。

▼坂本神父が新刊本

溝辺教会の坂本陽明（本名・坂本進）神父が三年余りを費やした研究の成果を一冊の本にまとめた。

タイトルは「大西郷の悟りの道　敬天愛人とキリスト教」で、西郷隆盛の思想の主柱をなす敬天愛人の源流を探ったものという。

四月上旬に南方新社から発刊されるA五版の同書は定価二千五百円（税別）となっている。

司教執務室便り

徳之島でもYOUCAT

「堅信を受けた中高生を中心にそこでもYOUCATの勉強を始めたい。夏前に一回…」そんなファックスを送ったのは二月だったと思う。なかなか返事がないので、塾や部活で多忙なのかもしれない。やはり無理かな。弱気になりかけていた先月初めに届いた小教区報「元気だれんせー」。「来た、来た！」まるで、合否通知を受け取るような気持ちで開封し、いつもはじっくり読む主任司祭の言葉をパスして下段のお知らせ欄に目をやった。「司教様YOUCAT勉強会」。「あった、あった！」まるで、合格発表で自分の名前を見つけた時のように、思わず叫んだ。嬉しかった。

そうそう、YOUCATというのは、ユースカテキズムのことで「若者に親しみやすい平易な文体で書かれたQ&A形式の教理解説書」（YOUCAT帯封）。「このカテキズムを学んでください。これは私の心からの強い願いです」という教皇ベネディクト一六世の勧めに従って全世界の若者たちの間で推進されている勉強会のテキスト。日本語版は、二〇〇八年のワールドユースデーマドリッド大会で配布された英語版を、参加した若者たちが手分けして訳したもの。まさに、若者の、若者による、若者のための教理書だ。

鹿児島鉱区でも少しずつ輪が広がり、昨年から教区本部と明光学園の二か所で始まっている。どちらもカトリック校ということで、信者でない参加者もいるが、この勉強会の一番の特徴は、生徒たちだけなく、先生やシスター、時には母親が必ず同席していること。共に学び合うということもさることながら、何よりも、子供たちの成長に大人が同伴する。これは大事なことだと思う。それは、教区目標でもある「寄り添う」ことであり、どこか微笑ましく、ホッとする教会の原初の姿を彷彿とさせるからだ。

今回の徳之島は三番目となるが、復活節中であるだけに、どんな勉強会になるか楽しみだ。教区中にYOUCATの輪がどんどん広がることを祈りたい。

会と催し（4月）

1日（水）聖香油ミサ・ザビエル教会・10時
2日（木）聖木曜日（主の晩さん）
▼中野裕明神父叙階記念（一九七八年）
3日（金）聖金曜日（主の受難　大斎・小斎）
▼聖地のための献金
4日（土）聖土曜日（復活徹夜祭）
5日（日）復活の主日
7日（火）成相明人神父霊名（聖ラサール）
12日（日）復活節第二主日（主のいつくしみの主日）
▼ME・教区本部・13時30分
13日（月）久保芳一神父叙階記念（一九七五年）
▼司祭評議会・教区本部・14時
▼教区司祭会・教区本部・16時
14日（火）定例司祭集会・教区本部・10時
▼ユーキャット学習会・教区本部・17時30分
18日（土）松森孝郎神父叙階記念（一九七一年）
19日（日）復活節第三主日
21日（火）奄美例会
▼教区巡礼委員会・教区本部・19時
22日（水）アン神父叙階記念（二〇〇六年）
25日（土）聖マルコ福音記者
▼ユーキャット学習会・母間教会・16時
26日（日）復活節第四主日
▼オリーブの会・教区本部・14時
▼世界召命祈願日

神は、すべての人が誠実に自分の生涯を過ごすように招いています。ある人は社会の中で会社員、医師、看護師、教員、工場で働く人として、また夫、妻、父、母としてよい家庭を築くように、そして、ある人は神と人とに仕える司祭、修道者となるように招かれています。神の招きはこのように人それぞれ異なりますが、自分に対する神の望みを祈りつつ探していくことが大切です。近年、司祭や修道者の減少、高齢化が進んでいます。とくに「世界召命祈願の日」には、司祭、修道者への招き（召命）に一人でも多くの人がこたえることができるように祈りましょう。この日は、教皇パウロ六世によって一九六四年に制定されました。

28日（火）ハンマ神父叙階記念（一九六三年）
29日（水）萩原義幸神父叙階記念（二〇一〇年）

祈りの意向

【ノベナ】教区の老人福祉等施設（奄美の園、聖園老人ホーム、めぐみの園）のため

【祈祷の使徒会】**世界共通**・天地万物
宣　教・迫害されているキリスト者
日本の教会・若者の就労

巡礼記

ザビエル様の情熱残るゴアへ
十年ごとのご遺体公開に合わせて
ザビエル教会主催でインド巡礼②

十年に一度公開される聖フランシスコ・ザビエルの遺体。昨年の十一月下旬から今年一月初旬の四十四日間がその公開期間に当たった。郡山司教の呼びかけで、聖ザビエルと面会するツアーを計画したザビエル教会は郡山司教、アン神父を代表に十九人の巡礼団を組織、十二月五日から六日間、ザビエルの息吹を味わう旅に出かけた。

お労しや　ザビエル様
ザビエル教会　小浦雅敏

ザビエル教会巡礼委員会が募集したインド・ゴア市の聖フランシスコ・ザビエルご遺体公開供覧ツアーに参加して、ザビエル様にお目にかかって参りました。

ザビエル様の御右腕には、一九四九年六月の東京都体育館での顕示式に両親に抱えられて参加して、見たと聞かされています。当時洗礼直後の二か月の嬰児ですので、はっきりした記憶は当然ありません。洗礼名はフランシスコ・ザベリオ。記録によれば、所属していた東京の大森教会でも、顕示が行われたとありますが、こちらの話は覚えていません。

インド・ゴア市に安置され、十年に一度公開されるザビエル様を是非訪問したいと思っていたので、今回の企画に喜んで参加させていただきました。

今回は、十七回目のご公開とのことで、第一回ご公開は百七十年前で、日本の信徒再発見以前のことなので、歴史の長さを感じます。

二〇一四年十一月二十二日に普段安置されているボム・ジェス大聖堂からご公開教会のシ・カテドラルへゴア大司教によって移された銀で縁取りされたガラスの棺に眠るザビエル様を拝謁できたことは無上の喜びでした。

ザビエル様は、アルバの上に赤い縁取りの金色のカズラを着ておられ、枕をされて、仰向けに左手を胸の上に置かれ、跣で眠っておられました。インドの大地の土の色に似た皮膚のお顔は目を閉じられていますが鼻もしっかりあり、ご尊顔を拝することができました。御手も御足も干乾びてはいましたが、肉厚があり、指先や爪の欠損は一部ありますが、一九五二年にお亡くなりになり、既に四百六十二年を経たご遺体とは決して見えません。

土から生まれ、土へ帰る肉体の我々からすると、土に帰らず、今もおられるザビエル様は、何を表わしているのかと考えます。日本・アジア布教の熱き思いのいまだ実現されないことへのお心残りなのか、実現の日までこの地に留まる意志の表れなのかと。

安息の眠りにお付きになれないでおられるザビエル様をお労しく思った今回の巡礼でした。

「あの日のこと」を忘れない！
ザビエル教会で3・11復興祈願ミサ

二〇一一年三月十一日に発生した東日本大震災では、一万六千人余りが尊い命を失った。また現在でも二千六百人近い行方不明者がいる上、被災地の復興は遅々として進んでいない。

心を一つにして祈りをささげる信者たち

そんな大地震から四年となった三月十一日には各地で被災者たちのための追悼と被災地の復興を祈る集いが開かれたが、教区の母なる教会ザビエル教会でも午後七時から郡山司教司式のミサがささげられた。

ミサには八十人ほどの信者が駆けつけ、震災で命を失った人、今なお苦しんでいる人、そして被災地の復興のために熱い祈りをささげた。

ミサで説教した郡山司教は、社会司教委員会の研修で原発事故の被災地で学んだことを報告するとともに、大地震が原因とはいえあれほどの被害を出した原発を再稼働しようとする為政者のためにも祈り、再稼動に反対しようと強く訴えた。

集まった信者たちも、その後の共同祈願で失われた命や愛する人を亡くした人のため、また原発事故地を含む震災被災地で働く人のために心を合わせた。

ミサの終わりには、真っ暗にした聖堂内で一人ひとりがロウソクに火を灯し、「東日本大震災被災者のための祈り」を静かに唱え、神の癒しを願った。

子どもたちとともに主日の福音を
『こじか』2015年度のご案内

こどもたちに福音を味わう１週間を

「わかりやすい」と好評の主日の福音解説を中心に、多彩な記事で子どもたちにイエスさまのまなざしを伝える「こじか」。どこへでも１部からお届けいたします。受洗、初聖体のお祝いやお孫さんへのプレゼントとしてもご好評いただいています。

毎週日曜日発行（年44週）　B5判・16頁（ふりがなつき）
定価65円+税（送料別）＊15部以上のご注文は55円+税
国内年間定期購読　1部4100円／２部7400円（税・送料込、2部の価格は同じ発送先の場合）

※お申し込み、お問い合わせ、見本誌請求は下記へ
オリエンス宗教研究所
〒156-0043　東京都世田谷区松原2-28-5
電話：03-3322-7601／Fax：03-3325-5322
http://www.oriens.or.jp/

文芸

短　歌

高札に踏まれし信仰二五〇年真の教え村人忘れじ　**鹿児島純心　川上　和**

春浅きフランス寺をのぞき見る指差す村人「サンタマリアよ」と
（日本の信徒発見祝日に寄せて）　**大笠利教会　稲　牛憲**

若くして逝きませし父母の償いを負はされし如く吾れ九十歳　**溝辺教会　松元　史江**

愛と知と信仰のひと美しきシスターシャロンの面影偲ぶ　**出水教会　遠竹　睦郎**

DVDにてキリストの磔刑のラストシーン許しの言葉心に残る　**出水教会　遠竹　睦郎**

俳　句

弥生待つ信徒の発見二五〇年　**鹿児島純心　川上　和**

轉に耳をとられての祈りかな　**鹿児島市　徳永ノブ子**

次々と巣立ちゆく孫桜かな　**国分教会　政　ノブ子**

ランドセルバザーで買ひし弥生月　**奄美市　林　常広**

マリア像両手を合わせて祈る朝　**出水教会　遠竹　睦郎**

カトリック通信講座

1972年開設以来の信頼と実績。『聖書入門〔Ⅰ〕』のコラムには、Sr.渡辺和子も登場

＜全7講座＞
T001：キリスト教とは＝キリスト教の概要
T002：聖書入門〔Ⅰ〕＝四福音書（イエスの生涯）
T003：キリスト教入門＝秘跡や信仰生活（洗礼準備にも）
T004：神・発見の手引＝人生、自然を通して神へ
T005：聖書入門〔Ⅱ〕＝使徒言行録・書簡・黙示録
T006：幸せな結婚＝結婚の意味や愛、幸福
T007：生きること・死ぬこと＝命に関する問題

＊詳細はホームページをご覧ください。

＜受講料＞（教材費・税込）
T001～T004　各4,800円
T005～T007　各5,300円

＜お申込み＞
郵便振替用紙にご希望の講座名・講座番号（T001～T007）をご記入のうえ、下記にお振込みください。入金確認後教材をお送り致します。

振替口座番号　：00170-2-84745
加入者名　　：オリエンス宗教研究所

＜お問い合わせ＞
オリエンス宗教研究所　カトリック通信講座
Tel：03-3322-7601 ／Fax：03-3325-5322
URL：http://www.oriens.or.jp